

三重県病院協会会報

Mie Hospital Association (MHA)

No. 295 2022(令和4)年1月

新春特集 年頭所感

三重県病院協会理事会

| | |
|-------|-----------------------|
| 竹田 寛 | 理事長 (桑名市総合医療センター理事長) |
| 齋藤 純一 | 副理事長 (松阪厚生病院院長) |
| 諸岡 芳人 | 副理事長 (済生会松阪総合病院名誉院長) |
| 河野 稔彦 | 理事 (富田浜病院名誉院長) |
| 新保 秀人 | 理事 (県立総合医療センター理事長・院長) |
| 森 拓也 | 理事 (鈴鹿中央総合病院院長) |
| 加藤 公 | 理事 (鈴鹿回生病院院長) |
| 加藤 俊夫 | 理事 (遠山病院理事長) |
| 富本 秀和 | 理事 (三重大学医学部附属病院教授) |
| 田中 滋己 | 理事 (三重中央医療センター院長) |
| 田中 光司 | 理事 (伊賀市立上野総合市民病院院長) |
| 楠田 司 | 理事 (伊勢赤十字病院院長) |
| 加藤 弘幸 | 理事 (紀南病院院長) |

令和3年度三重県知事表彰お祝い

ペンリレー

フォト・ギャラリー

三重はふるさと 空中散歩

四季折々

各種報告

三重県病院協会



表紙の解説

題字

揮毫は鬼頭翔雲先生です。先生は日展会員で、今までに特選2回、入選35回、一昨年に開催された日展で書道部門の審査員に中部地方でただ一人選ばれました。先生にとっては2度目の審査員ですが、日展の全部門を通じ審査員とされたのは、松阪市ゆかりの人では日本画の宇田荻邨（てきそん）と先生だけだそうです。他に読売書法会常任理事・審査員、中部日本書道会名誉副院長などの要職を務められています。

先生は、明るく気さくなお人柄で、誰からも好かれ、私にとっては30年来お酒と人生の師匠です。今回会報誌の題字をお願い致しましたところ、快くお引き受けいただきました。題字には、「力強さ」と同時に先生のお人柄である「おおらかさ」が表れ、私たちの会報誌を飾るのにふさわしい素晴らしい書であります。

デザイン

表紙の中央に淡い赤、青、黄の三重県地図3枚が、少し重なるようにして並べてあります。三重ですから単純に3枚並べてみたのですが、それが思わぬ効果を生み出しました。

病院は、医師、コ・メディカル（看護師、技術職員）、事務職員の三者が協力して運営していくことが最も大切であります。三色の地図は、三重県全体の医師、コ・メディカル、事務職員の集団を示し、県内のすべての病院では、これから三者が力を合わせて円滑に運営していくことを意味します。今まさにスタートの時ですが、あたかも陸上競技のスタートのように、三者が手をつないでスタートアップしているように見えます。また別の見方をしますと、ちょうど多度の上げ馬のように、馬が三頭、天に向かって飛翔しようとしているようでもあり、これからの飛躍をめざす私たちの協会を象徴するものであります。

またこのデザインを利用して、協会のロゴマークも作成しました。

表紙の背景は水色ですが、これは今までの会報誌の青色を少し薄くして引き継いだものです。

（竹田 寛 記）

新春特集 年頭所感 (敬称略)

三重県病院協会理事会

新春随筆 —コロナの後には—

| | | |
|-----------------------------|-------------------------|------------|
| | 理事長 (桑名市総合医療センター理事長) | 竹田 寛 …… 2 |
| 新年ご挨拶 | 副理事長 (松阪厚生病院院長) | 齋藤純一 …… 4 |
| 年頭所感 | 副理事長 (済生会松阪総合病院名誉院長) | 諸岡芳人 …… 6 |
| 年頭所感 「33年間理事職に在任して」 | | |
| | 理事 (富田浜病院名誉院長) | 河野稔彦 …… 7 |
| 年頭のご挨拶 | 理事 (三重県立総合医療センター理事長・院長) | 新保秀人 …… 9 |
| 年頭所感 | 理事 (鈴鹿中央総合病院院長) | 森 拓也 …… 10 |
| 2022年年頭にあって | 理事 (鈴鹿回生病院院長) | 加藤 公 …… 11 |
| 2022年の新年に | 理事 (遠山病院理事長) | 加藤俊夫 …… 13 |
| 年頭所感 | 理事 (三重大学医学部附属病院教授) | 富本秀和 …… 14 |
| 新年のご挨拶 —新型コロナウイルス感染症を乗り越える— | | |
| | 理事 (三重中央医療センター院長) | 田中滋己 …… 16 |
| 新年のご挨拶 | 理事 (伊賀市立上野総合市民病院院長) | 田中光司 …… 17 |
| 年頭所感 2022 | 理事 (伊勢赤十字病院院長) | 楠田 司 …… 18 |
| 2022年を迎えて | 理事 (紀南病院院長) | 加藤弘幸 …… 20 |

受賞おめでとうございます

| | |
|--------------------------------|----|
| 令和3年度救急医療・福祉・看護関係功労者三重県知事表彰 …… | 22 |
|--------------------------------|----|

ペンリレー

| | | |
|-------------------|----------------------------|------------|
| 身近になった東紀州と熊野詣 | 水沢病院 事務長 | 内山直大 …… 24 |
| 今の時代、そしてこれからの思うこと | | |
| | 医療法人社団プログレス四日市消化器病センター 事務長 | 田中秀人 …… 26 |

フォト・ギャラリー

| | | |
|--------------|------------|------------|
| 三重はふるさと 空中散歩 | 松阪市民病院名誉院長 | 小倉嘉文 …… 28 |
| 四季折々 | 三重県病院協会理事長 | 竹田 寛 …… 30 |

報 告

| | |
|------------------|----|
| 三重県病院協会だより …… | 32 |
| 三重県病院協会事務部だより …… | 33 |
| 三重県精神科病院会だより …… | 33 |



新春随想 —コロナの後には—

三重県病院協会理事長
桑名市総合医療センター理事長
竹田 寛



明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

昨年までの約2年間、何もかもコロナ・コロナでたいへんでした。特に第5波感染拡大時の混乱と悲劇は、二度と繰り返したくない大きなショックでした。たいへん辛い思いをされながら、じっと我慢してコロナ診療に頑張ってきた会員病院の先生方やスタッフの皆様方には、深い敬意を表し、改めて心より御礼申し上げます。ほんとうにご苦労様でした。

1) コロナ禍から学んだこと

コロナのために長い間延期となっておりました県内8医療圏における地域医療構想会議ですが、昨年11月に「意見交換会」が、また12月に「調整会議」が順次再開されました。私は、各医療圏の会議のどちらか一つにはアドバイザーとして参加させていただき、先生方のご意見を拝聴致しました。各地区におきましては、地理的、文化的、歴史的背景に固有のものがああり、人口動態も異なっていて、将来構想を論ずるには並大抵ではないということに改めて痛感致しました。そんな中で、ほとんどの医療圏において、「今回のコロナで学んだことは、規模の小さい病院では何もできない、ある程度の大きさの病院でないと、コロナ診療も救急も十分にやることできない」というご意見が寄せられていました。これは私たち病院勤務医にとって、ある程度共通した認識ではないでしょうか。

2) ポストコロナに備えて

今またオミクロン感染による第6波が始まりましたが、私たちは各医療圏および全県において、今まで以上に医療機関や介護施設、行政などが緊密な連携と役割分担を果たして、再び襲いかかってくる難敵に立ち向かわねばなりません。第6波がいつまで続くか分かりませんが、ワクチン接種が進み、様々な治療薬も開発されていますので、いつかそう遠くないうちにコロナは収束するものと考えられます。

そうなりますとポストコロナの問題です。国はコロナでこれだけお金を使ったのですから、コロナ後には相当厳しく財布のひもを締めて来るものと推測されます。またコロナにより、患者の病院や診療所離れも顕著になってきました。そのためかなり厳しい病院運営を強いられるのではないかと懸念されます。特に規模の小さな病院では、余計たいへんかと思われまます。それもあって国は、「病院の再編と統合により、日本全体での病床数は減らす但個々の病院の病床数は増やす」という従来の方針を、将来構想の一環として今まで以上に迫ってくるのではないかと予想されます。私たちの桑名市総合医療センターは、病床数307床、234床、79床の官民三病院を統合して400床の地方独立行政法人として誕生致しました。三病院合わせれば620床あるところを400床に縮小して新病院とした訳ですから、その意味では国の方針に合致しています。しかし統合には様々な難しい問題があり、一筋縄には行きません。そこで考えられますのが、病院間の連携です。それぞれの病院が役割分担を明確にして、緊密に連携することです。医療スタッフなどの人事交流、診療分野の役割分担、医療装置の

共同利用など、今までにない一歩踏み込んだ連携をすることが大切です。今後各医療圏におきましては、病院間でどのような連携を構築して行くべきか、検討を進めて行くことが肝要のように思われます。病院協会と致しましては、少しでもそのお手伝いをさせていただければと願っております。

3) 地域医療連携推進法人

その一つの方策として最近時々耳にするのが、地域医療連携推進法人です。その概要を列挙します。

- 1) 平成 29 年に開始された厚労省のプロジェクトである。
- 2) 病院や診療所、介護老人保健施設、医療者養成機関、地方独立行政法人や自治体など、それぞれの独自性を保ちながら緊密に連携して、より良い医療の実現と経営の効率化を図る。
- 3) 具体的には、医師はじめスタッフの人的交流、医薬品の共同購入、病院間の病床融通、病院間の資金の貸し付け、医療従事者の共同研修などを行う。
- 4) 現在全国で 21 地域医療連携推進法人が稼働しており、愛知県、岐阜県にも 1 つずつ出来ている。

単独では規模の小さな組織や事業体であって、多数集まって緊密な連携のもと共同運営することにより、より理想的な医療を実現し、経営の安定化が図れると言われます。

会員病院の先生方の中で、どなたかこの制度に詳しい方がいらっしゃいましたら是非ご教示ください。今年私はこの制度について勉強し、利点が多いということが判明しましたら、会員病院の先生方へ照会させていただきたいと思っております。

ともあれ、当面はオミクロン第 6 波と戦わねばなりません。会員病院の先生方やスタッフの皆様方、あくまでも無理のない範囲で、どうぞよろしくご協力の程お願い申し上げます。これがコロナに対する最後の戦いになるものと確信致しております。





新年ご挨拶

三重県病院協会副理事長
松阪厚生病院院長
齋藤 純一



新年明けましておめでとうございます。

唐突ではございますが昨年末、京都・清水寺の舞台で発表されました恒例の世相を表す漢字一文字は力強く揮毫された「金」でありました。オリンピックイヤーということもあり金メダルからの想起と、明るい話題を欲する希望からこのような支持が集まったのではないかと考えております。

もし『昨今の当会の「金（金メダル）」は？』との質問を受けましたら、私は理事選出にかかる機構改革と広報改革を挙げたいと思っています。

理事選出にかかる機構改革は竹田理事長の提案・指導の下に担当理事の先生方のご努力の結果であり、当会の舵取りを担う理事の先生方を地域、規模、官民等多様な視点から選出を行うことを軸とした改革です。広報改革は、当会をより多くの皆様に、より深く知って頂くことを形にした改革です。1993年厚生労働省から一部例外もありますが、各省庁で使われる全ての行政文書規格をA4とする指針が示され今やビジネス文書においてもA4版が主流となっています。当会広報誌規格もB5版からA4版にサイズ変更し内容も更に充実させたものとなっています。またインターネット社会に呼応し、当会のホームページを立ち上げ、新たな広報媒体として運用頂いております。紙媒体では成し得ない大きな可能性がここには有るのだと思っております。

扱、私事で大変恐縮なのですが、話は当会一部会員で構成されます三重県精神科病院会に及ぶのですが昨年の三重県精神科病院会主催の第12回三重精神科医療フォーラムの挨拶文の中で「…アメリカの経済学者シュンペーターはイノベーション（技術革新）という概念を生み、技術革新により経済は飛躍的に発展することを述べました。医療も例外では無いと考えます。…」と述べさせて頂きました。大会テーマが「精神科医療は進歩と革新の大きな変化の時代にさしかかっている - 精神医療の大変革時代へ -」であることから革新について言及したものであります。

当会も今まさに、理事選出にかかる機構改革、広報改革をはじめ種々の取り組みにおける「改革・革新」の最中にあります。これらの取り組みに関与頂きました先生方には敬意を評すると共に当会がこの「改革・革新」を以って一層の飛躍的な発展を遂げ、地域の皆様の医療環境が益々向上していくことを期待しています。

更に、もし『昨今の当院の「金（金メダル）」は？』との質問を受けましたら、こちらは真っ先にコロナ対策と答えるでしょう。

当院は当院職員、入院患者様、関連施設職員、関連施設入所者様を合わせると2,000人ほどの人員がみえます。このような状況の中、新型コロナウイルスの発生から現時点までの約

2年間、コロナウイルス感染者は0人であります。この数字は地域の病院様、行政関係者様及び職員等をはじめ、各方面多数のご協力による賜物と思っています。

当院のコロナ対策は「医療安全管理・危機管理室会議」なる会議（週1回開催、参加者は院長、院長代理、副院長を含む部署長20余名、90分程度）を中心に据え、各部署が抱える感染リスクについて検討し方針を定めています。毎週更新しながら現時点での決定事項はA4用紙10枚にもものぼり職員はその決定事項に基づき感染対策を行っています。

具体的な取り組み事例を申し上げますと、一つは2020年8月から開始しています抗原定量検査の活用です。少々窮屈ではありますが、職員に県外往来、県外往来者との接触、体調不良等々感染リスクを疑う事柄につき日々報告を求め、その報告内容を元に必要に応じて病院主導により積極的な抗原定量検査を行っております。また職員のみならず職員家族、取引業者においても適応範囲とし同様の対応をとっています。

他にも「コロナ対策ラウンド」と称し、三密を意識しつつ職員が毎日全ての部署を巡回し、換気、マスク着用、ソーシャルディスタンスの確保、手指消毒等に対しての確認と指導を実施、「水際対策」と称し、全ての受診者様に対しての玄関で検温は勿論のこと行動歴の確認を行う等々誌面では紹介しきれないのが残念ではありますが数多くの対策を実践しております。日頃の多忙な業務に加え、先が見通せない中、日々行っていることであり、職員の頑張りには感動を受けています。

一方、昨年末から世界的に猛威を振るっているオミクロン株が新年早々日本でも急拡大を見せています。再度気を引き締め、オミクロン株を想定した感染対策の見直し、取り組み強化を図っていきたいと思っています。何とかこの一年で人類の英知を結集したワクチン・治療薬等の開発が医療界に革新をもたらし、このコロナ禍を乗り越えていけるものと期待しています。

ところで私事ではありますが当会の副理事長を20年もの長きに亘り務めさせていただきました。歴代理事長先生をはじめ多くの諸先生方、事務局の皆様、関係者の皆様に支えていただき、微力ながらではありますが地域医療の為に尽力いたしてきたつもりです。ありがとうございました。

この20年という節目をもって一つの区切りと考えております。お世話になりました皆様には衷心よりの感謝の意を申し上げ、年頭のご挨拶とさせていただきます。



年頭所感

三重県病院協会副理事長
済生会松阪総合病院名誉院長
三重県済生会支部長
諸岡 芳人



新年あけましておめでとうございます。
今年の干支は「壬寅」（みずえのとら）と言います。「壬寅」は厳しい冬を耐えた後に、生命力にあふれ、新しい成長の礎となる春の鼓動を感じる年と言われます。今年こそ、人々が心の春を迎える事が出来るようもうひと頑張りしようではありませんか。

皆さん良い初夢を見られましたでしょうか？私の願っていた初夢は、新型コロナが今年中には収束する夢で、それが正夢となる事でした。しかし残念ながら、正月明けの御屠蘇気分も抜けないうちに第6波がやってきてしまいました。昨年末はワクチン効果によるものか、新型コロナ患者が激減し、一時平穏な日を取り戻しましたが、うたかたの夢に終わってしまいました。しかしながら100年前のスペイン風邪は自然に収束したという事実があり、オミクロン株による感染者には重症化する患者は極めて少ないと聞き及ぶにつけ、今年中には平穏な日が戻る気がします。しかも我々にはワクチンがあり、治療薬も手にしつつあるではありませんか。

毎年同じような話ですが、初夢といえば「一富士二鷹三茄子」という言葉があります。wikipediaを見ると、このことわざの起源の諸説が書かれていますが、その一つに、徳川家康が富士山、鷹狩り、初なすを好んだことが起源『史疑 徳川家康事績』というのがあります。長く平安の世が続いた江戸時代の開祖である家康と結びつけることは納得出来る気がします。

さて、対コロナとの戦いにおける三重県病院協会の活動については、皆様の目にはどのように映っているか分かりませんが、企業などから頂いた、病院に対する支援物資の受け皿になっただけではありません。竹田 寛理事長は、県と緊密な連携を取り、様々な助言を行っており、対コロナ行政と医療に貢献をされています。しかしながら、竹田 寛理事長の孤軍奮闘という感はぬぐえません。私自身、殆ど理事長をサポートすることもできず、副理事長失格の判を自ら押さざるを得ません。今後の三重県病院協会の課題は、平時と非常時（感染症パンデミックや大規模災害）の活動体制を考え、整えていく事にあると思いを強くしました。今後各医療圏の中で、病院協会メンバーの連携を強化し、非常時には、各医療圏の代表者（仮に三重県病院協会支部）が参集し理事長をサポートし、ひいては会員病院に迅速、正確な情報発信をして行くような体制づくりが必要ではないかと思考します。

コロナ禍の混沌の中にチャンスありという言葉もあります。ただでは起きない気持ちで病院運営にも頑張って頂きたいと思います。



年頭所感「33年間理事職に在任して」

三重県病院協会理事
医療法人 富田浜病院
名誉院長・医学博士
河野 稔彦



新年あけましておめでとうございます。

顧みますれば三重県病院協会の理事に、遠山豪先生の推薦で就任して以来、33年の月日経ちました。昨年医療法人富田浜病院理事長を退任した為、三重県病院協会理事も退任を申し出たところ、次の改選まで続ける様に、竹田理事長に命ぜられ、今年も年頭所感を執筆することになりました。

医療法人富田浜病院は大正7年5月に石田誠先生により結核療養所として設立され、翌年富田浜病院になりました。その後月日を重ね、令和元年に創立100周年を迎えることができました。

一昨年から新型コロナが猛威を振るって、未だ収束の気配の見えない年明けで、とてもおめでとうと言う気持ちにはなりません。疾病、感染等により人類が先人達の歩んだ茨の道は想像に難くないですが、さまざまな実験、研究があり、医療の進歩に応じて変化してきました。今世界中はコロナ問題で四苦八苦していますが、ワクチンも治療薬も出来つつあるし、2~3年で片が付くと思います。

私が一番心配しているのは、中国の動きです。尖閣列島は1960年代後半に、東シナ海で石油埋蔵の可能性があると指摘されて以後、中国や台湾が領有権を主張し始め、外圧や実力行使を繰り返しています。中国共産党は無理やり香港を統一し、ウイグルでは人権弾圧をしています。過去にはチベットや内モンゴルを占領しました。その中国の非人道的行動を、世界中が怒っています。オバマと習近平は南シナ海では軍事基地を増設をしないと約束したのに、習近平は軍事基地を作りつつあります。そして「一帯一路」構想のもと、第一列島線の確立を画策して、台湾や尖閣諸島を中国に編入しようとしています。

過去には日本の竹島が、韓国に実効支配されています。現実には起こっていることなのです。日本の外交政策の間違いの為、竹島も日本領土なのに、韓国に自国の領土の様に扱われ、もう戻って来ないでしょう。同じ様な事が起ころうとしているのです。

国際的には中国の動きは「戦狼外交」と呼ばれ周辺国から警戒されています。この動きを阻止するために、インド太平洋の安全保障の枠組み(オーカス、AUKUS)を新設し、中国の海洋進出へのけん制を強めています。また日本が最初に提唱した『自由で開かれたインド太平洋構想』実現のための日米豪印4ヵ国戦略対話(クアッド、QUAD)で対抗しています。でも日本の政府、経済界、特にマスコミはどうでしょうか。この事に対し凄く消極的です。

過去においては、30数年前には日本はバブルの最中で、GDPも世界第2位でジャパンイブナンバーワンと言われてました。その実力は、日本企業のソニーがアメリカのコロンビア映画を買い取り、三菱地所がニューヨークのロックフェラーセンタービルを買い取った話はあまりにも有名です。今や、その日本がGDPでは中国に抜かれて、第3位になり、第2位になった中国は10年後にはアメリカを抜く勢いと言われていています。中国は10年後には日本侵

略を狙っているのです。中国はその計画の一環として、日本の土地を各地で買い取っています。有名なのが北海道です。「なぜ外国人が日本の土地を買えるのか」という疑問を持つと思いますが、このゆるい法律は約 30 年前から、改正すべき法案として毎年国会に提出されていますが、公明党や親中派の議員の反対で成立していません。誰でも日本の土地が外国に買われるのは、おかしいと思うのに、これが日本の政治の現実です。我々日本人はもっと先見性を持って 10 年、20 年後に、今私達が危惧していることが起こらない様に、知識を豊富にして、日本の政治に目を光らせて下さい。

今後の日本は少子高齢社会を迎え、未曾有の人口減少社会へ突入していきます。私達日本人は世界に類を見ないこの変化に対応していかなければなりません。この新型コロナに見舞われ、世の中が様変わりしつつあり、病院経営もこの変化に対応する為、新旧交代の時期と考え昨年 6 月に、長男の稔文院長に理事長職を譲り、名誉院長に就任いたしました。昨年、喜寿を迎え、馴染の患者さんに「先生次に来るまで元気でいてね」と言われるようになり、心配してもらってうれしいような、情けないような日々を送っております。そんな患者さん達の為にも、もう少し医師として頑張ろうと思っております。

三重県病院協会理事の先生方にも、長い間ご指導有難うございました。





年頭のご挨拶

三重県病院協会理事
三重県立総合医療センター 理事長・院長
新保 秀人



新年明けましておめでとうございます。

2022 年が世界中の人々にとりまして良き一年になりますことを心よりお祈り申し上げます。このことは例年以上に重く感じる気がしております。

ここでは 2021 年を振り返りつつ新年の抱負を記載します。

まずコロナ対策です。当院はコロナ患者さんの対応では中等症の入院に加えて重症、さらに ECMO 対応も求められております。また去年はコロナ陽性の妊婦さんの入院、また分娩、さらには H I V 陽性の方のコロナ罹患にも対応いたしました。中等症は当初 10 床でしたが増加に伴い 14 床まで増床し対応しましたが患者数が最多の時期の 50 日間では平均稼働率が 134%までになるなどの対応をせざるを得ませんでした。重症者も 6 床で対応しましたが 100%稼働の日が長く続きました。一方で、第 5 波の前に重症者の治療体制と治療体系の見直しを行いました。すなわち救命救急センター内にコロナ重症病床 6 床を設置し、管理しやすい体制にしたことと、腹臥位療法をより早期から開始する方針を取ることにしました。その結果、幸いにも第 5 波では重症も含めて死亡を認めず重症者への治療、重症管理体制にある程度の手応えを感じているところです。しかし迫りくる第 6 波への対応には今後苦慮しそうです。

働き方改革では対応を始めております。入退館チェックシステムを整備し、医師の夜間のログアウトなどもチェックするなど少しずつですが進んでおります。とは申しましても連続勤務 28 時間超、9 時間インターバルなどが残された課題となっており今後も試行錯誤をしつつ対応していく予定です。

今年は当院の中期計画の初年度に当たります。いくつかの大きなプロジェクトを予定していますが、コロナ禍においてスムーズにことが運ぶのを願っているところです。

現在施設長寿命化計画を進めているところです。手始めに空調エネルギー源の更新を行い、さらに全館 LED 化を進めております。これらにより年間使用エネルギーがかなり節減できる予定です。患者さんのみならず地球にも優しい病院をささやかながら目指せるかなと感じております。

最後になりますが本年もしばらくは新型コロナウイルス感染症との戦いは続くと思われ、予想されておりますので三重県病院協会の役割は今年も極めて大きいと思います。全県で県民の皆様の健康を守っていく必要があります。私どもも微力ながら貢献できればと考えております。皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。



年頭所感

三重県病院協会理事
鈴鹿中央総合病院院長
森 拓也



新型コロナウイルスと対峙して、約2年が経過しようとしています。第1波経過後から県との調整により当院は軽症・中等症を中心に、呼吸器管理の必要な重症例も対応可能な入院体制作りを行いました。当院では緩和ケア病棟（20床）を別棟にて稼働しており、感染対策がしやすい個室配置やゾーニング等を考慮して、緩和ケア病棟をコロナ病床に転用することにしました。重症患者も一括して治療できるように、本来であれば緩和ケア病棟には必要のない人工呼吸器が使用できるように工事を行い、2部屋に陰圧システムを導入しました。リモートでの観察・診察をするためのモニターを設置しました。三重県内の病院にも緩和ケア病棟をコロナ病床に転用されたところもあると思います。NHKの全国医療施設に対する調査によると、第5波のさなかに緩和ケア病棟の閉鎖や休止するという対応をとっていたのが11.2%に上ることがわかりました。この状態が続くと、緩和ケアのスキルを持つ看護師などの貴重な人材の退職も起こります。緩和ケアの患者さんに不利益な状況が生じていきます。冬場来ると予想される第6波を考えると、現在のコロナ体制の維持は必要です。緩和ケア病棟の本来の姿を取り戻すのはいつになるのでしょうか、予想がつきません。

新型コロナウイルスの感染後、長期間続くコロナ後遺症に悩む患者が存在しています。国立国際医療センターの調査によると、感染者の4人に1人が半年後も後遺症が残り、約1割は1年後も症状が残ったといいます。WHOの後遺症についての定義では「感染症確認から3か月以内に発症し、2か月以上続くが、他の病気では説明できない症状」としています。さまざまな症状が現れるメカニズムはほとんど解明されていません。コロナ後遺症は情報が少なく、患者も勤務先も先行きが見えず、どのように対応していったらよいのか戸惑っている現状です。COVID-19診療の手引き「罹患後症状のマネジメント」が2021年12月1日に厚生労働省よりようやく発行されました。罹患後症状とはいわゆる後遺症あるは遷延症状です。今後の更なる改訂版を期待します。

中部の上場企業が10月から11月に発表した中間決算で最も使用された単語は「増加」でした。増加の前には収益、販売、利益などの増えることが望ましい言葉が登場します。コロナの登場回数は大幅に減っており、企業は「コロナ」から「アフターコロナ」へと視線を移しているようです。今年こそはコロナ終息を期待したいところですが、オミクロン株の特徴が十分解明されていません。病院協会の皆さんと力を合わせてコロナへの対応を効果的に、効率よく行うのみです。



2022 年年頭にあって

三重県病院協会理事
鈴鹿回生病院院長
加藤 公



新年あけましておめでとうございます。

昨年 2021 年も 2020 年に続いて、最後まで新型コロナウイルス感染症に振り回された一年でした。春先に始まったワクチン接種で、順調に感染者数が減っていくのかと思いましたが、第 4 波、第 5 波と次々に感染大流行がありました。多くの人が感染して、多くの人が亡くなりました。1 年遅れの東京オリンピック・パラリンピックも異例の無観客開催で行われ、三重県で行われる予定であった三重とこわか国体、とこわか大会も中止になってしまいました。

鈴鹿回生病院は一昨年来、一般の急性期病棟 1 病棟をコロナ病棟に変更して、コロナ患者受け入れ病院として運営してきました。しかし、昨年夏にデルタ株によってもたらされた第 5 波はこれまでとは全く違う大きな波として押し寄せてきました。8 月中旬から、三重県でもコロナ感染者が急増して、当院のコロナ病棟も病床が一気にひっ迫しました。9 月初旬には、その対策としてのコロナ病床の増床に伴うコロナ病棟へスタッフ増員のため、地域包括病棟を一時的に全床休床にしてコロナ患者さんを受け入れて、何とかこの第 5 波を乗り切りました。その後急速にコロナ患者は減少して、11 月に入ると三重県内の発生はほとんどない状態にまでになりました。そろそろ after コロナの計画をと考え始めた 11 月末には、オミクロン株の発生が世界各地で確認され、年末年始に向けて、この変異株による第 6 波が現実味を帯びて、コロナ警戒がぶり返すといった状況でした。

こういった状況から、今年になっても新型コロナウイルス感染終結は不透明と言わざるをえず、われわれはうまく with コロナで生きていかねばなりません。ワクチン接種、基本的予防対策の必要性は当分続くでしょう。そうはいっても、明るい兆しがないわけではありません。ワクチン接種が進み、感染流行には変化も見られてきたと思います。そうすると次のステップは、やはり after コロナということになります。何をどうやって戻すのか、どう変えるのかを考えねばなりません。

700 年前に兼好法師が著した徒然草の 109 段に木登りの名人の話があります。人に指図をして高い木に登らせて枝を切らせていたとき、名人はいかにも危ないと思える高い所では何も声をかけず、作業を終えて身の丈ほどまで降りてきたときはじめて、気を付けるよう声を掛けました。不審に思った兼好法師が理由を尋ねると、難しい所では気が張って自分で気を付けるので注意はいらぬが、もう大丈夫とってから間違いというもの起きるものなのだと答えたという話です。この話は、明るい兆しが見えてきた after コロナの対策こそが肝要であることにつながるものと思います。これからの病院のあり方にもつながることなので、心してかかる必要があると考えます。三重県病院協会でも、病院間はもちろん、医師会や行政、県民の皆さんとのつながりを大切にして、after コロナの問題に取り組んでいくことが必要だと考えます。

それにしても、われわれはもう足掛け2年コロナ禍にいます。こういった死にも直結するような疾病と対峙する毎日を過ごしていると健康な方でも、病気や死について考えてしまうものです。しかし、こういう時だからこそ、日常の楽しみ、ありがたみを再認識できるのかもしれない。また徒然草ですみませんが、93段に「存命の喜び、日々に楽しまざらんや」とあります。今のこの状況に浸ることで、どんな金銀財宝や地位名誉よりもこの今日の一日に価値を見出すことができ、生きる喜びを得られるのです。私もいつもと同じことができる幸せを噛みしめたいと思います。

新型コロナウイルスとの戦いは、with コロナ、after コロナの時期となってまだまだ続いていくことが予想されます。そういった中でも、地域の皆様が医療体制に不安なく暮らしていただけるよう本協会理事として頑張っていきたいと思っております。最後になりましたが、会員並びに関係者の方々のご支援を心よりお願い申し上げます。





2022年の新年に

三重県病院協会理事
遠山病院理事長
加藤 俊夫



あけましておめでとうございます。寒いお正月を迎えています。年改まった新鮮な冷気を感じながら、子供のころの雪のお正月を思い出しています。

大晦日の夜から降り始めた雪が、夜の景色を白く染めはじめ、お正月用に坊ちゃん刈りの前髪をそろえ、足の指先と耳たぶに少ししもやけを作った子供のころの自分が、何度も何度も窓際に行って、降り続く雪に胸をときめかしていました。まだ白黒テレビで、紅白歌合戦の大トリの美空ひばりの歌が終わり、行く年来る年を炭火のこたつの中で見ていると、あの頃の元気だった父や母がそろそろ寝るように言っています。冷たい布団にもぐりこんでいつしか眠りについた次の朝、屋根も庭木もすっぽりと包んだ雪景色が、お正月の朝日を浴びて輝いていました。雪の朝、喜んで外に飛び出していった、私のこんな遠い思い出の日々は、もう何十年も前の昭和のある日のことになってしまいます。貧しくはないまでも今ほど豊かでなく、情報も乏しく、お正月の分厚い新聞や年賀状、お正月向けの付録がいっぱいの少年向けの雑誌が楽しみでした。お正月は少しよそ行きの服を着て、お正月に出会う誰もが笑顔でやさしく、年改まりまたよい年になりますようにと願っているように感じたのはまだ幼かったからでしょうか。

お正月を迎える人々の気持ちはいつの時代も変わりはなく、あたたかい人の心のふれあいも変わりはないと思いますが、それでも時の流れと共に世の中の価値観がずいぶんと変わったことも実感します。世の中のさまざまな価値が、お金という物差しで計られるのは昔から変わりはないことですが、その風潮があからさまになってきたように感じます。誰もがお金を得るために働いており、すべての会社やお店や世の組織が、世界の大国ですら自国の利益を主張してお金のために動いているのですから、受け入れて努力しないといけない当たり前の現実には違いありませんが、病院もまた例外でないことに何か違和感を覚えずにはいられません。

患者さんや家族に対するいたわり、思いやりの気持ち、決してお金では計ることのできない、献身、奉仕、博愛の精神、医療という現場で大切な何かが置き去りにされていないか考えさせられます。少子高齢化の医療環境に加えて、新型コロナウイルス感染症の蔓延は病院の経営環境も激変させています。自分自身が豊かで余裕がなければ、他人に対する献身、奉仕もままならないのも現実です。押し寄せる様々な病院経営の荒波に、今は耐えながら、いつか落ち着いて余裕のある医療が展開できる日が来ることを祈るものです。

オミクロン株の蔓延が現実になってきたようです。この波を乗り越えて、今年がよい年になりますよう祈ります。



年頭所感

三重県病院協会理事
三重大学医学部附属病院教授
富本 秀和



明けましておめでとうございます。昨年はコロナ対応に明け暮れた一年でした。年頭にあって今年が良い年になってほしいと切に願っていますが、三重大病院の現状と課題を通して、大学教育と地域医療の観点から今年を展望してみたいと思います。

三重大学病院では2020年に起こった麻酔科事案のあと、同じ10月には三重大麻酔科プログラムが停止となる事態が発生し、三重県下の麻酔科医師の大量離職が発生し、研修医の養成や大学病院の手術診療体制にも深刻な懸念が生じました。これに対しては外科系診療科を中心に病院を挙げての協力体制を一致団結して構築し、手術体制の維持や改善に努めているところです。加えて、昨年来、麻酔関連講座の一本化の方向が決定され、麻酔科学講座と臨床麻酔部が合流して麻酔科学分野教授の公募が開始されました。幸い本年に入り、年頭の教授会で教授候補者が決定されたところです。これから、候補者を中心に三重大麻酔科が再生し、三重大病院のみならず、県下麻酔科医の教育や臨床・教育の要となって発展することを期待しています。当たり前ですが、大学病院は学生教育を通して、若手の医師を地域に供給するという重要な使命を帯びています。麻酔科プログラムの停止はこの機能が喪失することを意味しており、病院全体で協力し、新教授を中心として一刻も早くプログラムが再開されるような努力が必要と思っています。

一方で、地域医療における若手医師の動向にも大きな変化が生じています。現状では地域枠A、Bや三重県地域医療枠の学生、奨学金の貸与学生をすべて合算すると4名に一人が医師不足地域への赴任を義務付けられています。また、医師不足地域の定義が明確化されて、派遣の期間や要件が周知されるようになってきました。このため、地域枠であるにも関わらず医師不足地域での研修を経ずに都市部に流出してしまうケースもかなり減ってきました。また一方では東京や関西圏などの都市部では、診療科によって入局者数に制限がかかるシーリングが実施されるようになっており、極端な医師偏在は緩和される傾向にあります。若手医師の育成の観点からは、卒業後すぐに過度の専門化を志向するよりも、最初に幅広く内科や外科を経験することは長期的な診療能力の涵養には重要と思います。

実際に、私どもの脳神経内科医局でも2年前から地域枠研修医の東紀州地域への派遣を開始しています。その際に、基本領域にある内科（または外科）とその上にあるサブスペシャリティ診療科の連動研修が課題となります。と申しますのは、医師不足地域ではサブスペ診療科の指導医はいないため、研修歴をとれないことを嫌って若手医師が医師不足地域に行くことを避ける傾向がありました。この問題を解決するため、日本神経学会では特別連携施設制度を作って、指導医不在でも研修歴を算定できる要件を定めています。東紀州の紀南病院はその指定を全国第一号で取得していますが、地域枠研修医の志望が増えて3年先まで赴任希望で埋まっています。今後、医師不足地域に若手医師が赴任できる環境を整備していく上では、このような方法も有効な手段かと思っています。もう一つのポイントは、地域医療を勉強

することが将来の専門診療を行う上で大いに役立つことを知ってもらうことも大事です。私どものところの若手医師も、赴任前は他科の専門診療を求められたら対応できない、という不安を漏らしていましたが、実際に1年間赴任してみるとほかの領域を幅広く経験できて役にたった、楽しかったという感想を述べています。1年間、あるいは長くても2年間で定期的に交代できる循環するシステムを構築できれば、地域の医師不足の強力な解決手段になると確信しています。

末筆になりますが、この挨拶文をしたためている間にも第6波の足音が忍び寄っている心配があります。コロナに負けない強力な三重県の地域医療体制の祈念し、年頭のご挨拶に代えさせていただきます。

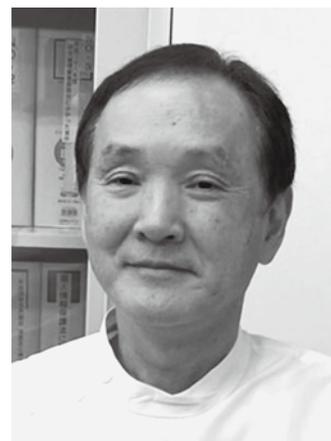




新年のご挨拶

—新型コロナウイルス感染症を乗り越える—

三重県病院協会理事
三重中央医療センター院長
田中 滋己



新年あけましておめでとうございます。新型コロナウイルスによるパンデミックのなか2年目のお正月となりました。

この間に国内の経済や暮らしに大きな影響を及ぼしたコロナ禍ではありますが、去年は新型コロナウイルス感染症対策に於いて幾つかの進歩がみられました。ワクチン（mRNA やウイルスベクター）の接種が多く、国々で始まり、日本でも11月末の時点で2回接種率は総人口の約77%と報告されています。加えて去年の秋には米国で経口抗ウイルス薬の承認申請が出されるなど、昨年1年間で感染症対策に於いては注目すべき進歩がみられています。

これまでで最大の感染流行となった第5波では日本中で医療の逼迫する状況となり、三重県でも救急医療において大きな影響が出ました。しかし、同時期に粛々と進められていた新型コロナウイルスワクチン接種や地域の医療機関の連携によって辛うじて第5波を乗り越え、その後の小康状態へと移行させることができました。とは言っても、新しい変異株であるオミクロン株の出現には世界中が注目しており、これから危惧される第6波にも備える必要があります。新型コロナウイルスワクチンは100%の感染予防、重症化予防効果があるわけではありませんが、感染症のリスクと向き合っていく為には、とても重要な予防対策です。ワクチンにより防御を固めた上でスタンダードプリコーション（標準予防策）を継続、遵守し感染拡大を防いで行かなければなりません。

新型コロナウイルスはヒトが唯一の宿主である天然痘ウイルス等とは異なり、ヒト以外の宿主を有して地球から根絶することは出来ません。インフルエンザウイルスのように変異を繰り返し、感染性、毒性が変化して季節性の感染症となっていくと予想されています。従ってワクチン、抗ウイルス剤が充実し外来診療、自宅療養で対応できる通常の季節性感染症となった段階で新型コロナウイルス感染症を乗り越えることができたと判断できるでしょう。冒頭に述べましたように世界は新型コロナウイルス感染症に対抗する手段を揃えつつあり、「新型コロナウイルス感染症を乗り越える」日は、そう遠くないと思われます。

その日の到来を期待しつつ根気強く新型コロナウイルス感染症に向き合い続けて、患者様が安心して受診出来る医療体制の提供を目指して尽力して行く所存です。

本年もどうぞ、よろしくお願い申し上げます。



新年のご挨拶

三重県病院協会理事
伊賀市立上野総合市民病院院長
田中 光司



新年あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いたします。

2021年の伊賀医療圏と上野総合市民病院の現状を振り返り、2022年の抱負を述べたいと思います。

伊賀医療圏は、伊賀市；約8万8千人、名張市；約7万6千人の合計16万4千人からなる医療圏で人口減少と高齢化が進んでいます。岡波総合病院・名張市立病院・上野総合市民病院による夜間・休日の時間外救急の輪番制において、令和2年度は岡波総合病院：2700人、名張市立病院：2865人、上野総合市民病院：2351人の時間外救急患者を受け入れました。

令和2年度の上野総合市民病院の診療実績は、入院患者数：62514人、外来患者数：60191人、消化器内視鏡件数：4235件、手術数：864件、がん登録患者数：350件でした。

総務省のホームページでは自治体病院の決算状況・病院経営比較表が公表されています。令和2年度の当院は、経常収支比率：103.9%、医業収支比率：96.7%、平均入院患者数：171.3人、稼働率：61.0%、職員給与費対医業収益比率：56.1%、委託料対医業収益比率：11.7%、医師数：19人、看護師数：149人、繰入金：461878千円、他会計繰入金対医業収益比率：8.4%でした。当院は職員数の少なさをチームワークでカバーし、なんとか医療提供体制を維持しています。

安全で質の高い医療を提供するためには、まず、職員のスキルアップが必須となります。業務改善・生産性向上の目的は経営改善ではなく、職員がスキルアップできる職場環境を整えることです。たとえば、診療業務時間を短縮できれば（業務改善）、院内・院外の研修や研究会・学会へ参加する時間が確保できます。勤務時間内に多くの業務をこなすことができれば（生産性向上）、より多くの患者を診療でき、患者に喜んでもらえます。業務改善・生産性向上による職員のスキルアップは、患者満足度（はやく、うまく治してくれる）だけでなく、職員満足度（患者に喜んでもらえる医療ができるという達成感）の向上に寄与すると思います。

Volume-outcome relationshipとは、患者数と診療成績は相関することを示しています。当院が患者に喜んでもらえる医療を提供すれば、受診する患者が増え、多くの経験を積んだ職員はさらに安全で質の高い医療が提供できるようになるという好循環が生まれます。

2021年より7つのチーム（消化器疾患、整形外科疾患、救急医療、心不全、がん化学療法・緩和ケア、栄養サポート、在宅支援）が、「患者のため」をキーワードに活動を開始しました。多職種混成メンバーが特色です。

2022年も「伊賀地域で必要とされる病院とはどうあるべきか」を考え続ける1年になります。

三重県病院協会会員みなさま、竹田 寛 理事長、理事みなさま、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



年頭所感 2022

三重県病院協会理事
伊勢赤十字病院院長
楠田 司



あけましておめでとうございます。気持ちも新たに2022年(令和4年)を迎えることとなりました。

昨年を振り返りますと、コロナで始まり、コロナで終わるという1年でした。一昨年に引き続きコロナ対応に迫られた年でしたが、慌ただしい中で当院が取り組みました2点をご紹介します。

まず1点目は、がん診療体制を整備し、4月に地域がん診療連携拠点病院(高度型)の指定を受けたことです。日本人の死因で最も多いのは悪性腫瘍であり、今や日本人の2人に1人ががんに罹患し、4~6人に1人が死亡しています。2006年に「がん対策基本法」が制定され、がんの予防及び早期発見の推進、がん医療の均てん化、がん研究の推進やがん患者の就労、がんに関する教育の推進と幅広い対応策が謳われています。そしてがん医療の均てん化を目的に整備されたのが、がん診療連携拠点病院です。現在、三重県には「都道府県がん診療連携拠点病院」として三重大学附属病院、「地域がん診療連携拠点病院」として市立四日市病院、鈴鹿中央病院、松阪中央病院、伊勢赤十字病院の4施設が指定を受けています。また、地域がん診療連携拠点病院の中でも、特に高い診療機能等を有する医療機関は地域がん診療連携拠点病院(高度型)に指定されます。高度型の指定を受けるには、がん相談支援センター、緩和ケアセンターの更なる整備やスタッフの拡充などの緩和ケアの取り組みが特に優れていること、同一医療圏内において診療実績が最も優れていることなどが求められます。

全国的には、地域がん診療連携拠点病院は289か所が指定を受けているのに対し、その中の高度型は50か所に過ぎず、三重県では当院1施設となります。

高度型の指定を受けることにより、がん患者に対して専門性が高く、精神的、社会的、経済的な問題を多職種のスタッフが包括的に対応し、がん発見当初から終末期までのすべての病期に対して重層的な支援体制を構築することが求められます。がんにより人生の質を損なうことなく、がんとともに有意義な人生を全うするには欠くことのできない医療施設となることを期待しています。

2点目の取り組みは、精神科身体合併症病棟の新設です。当院は救命救急センターを擁し、救急車や重篤患者来院数は全国屈指です。この中には精神疾患を患い、自殺企図による傷病者も一定数含まれます。こういった患者さんが初期対応により救命し、入院となった場合、身体疾患と精神疾患を合わせて治療していかなければなりません。しかし、一般病院は精神保健福祉法が適応されませんから、措置入院や医療保護入院は困難であり、拘束といった処置も安易にできません。極めて制限が多く、医療者側にはストレスの多い環境下で医療を提供することになります。また、伊勢志摩は、全国平均より高齢化が進んでおり、認知、せん

妄患者も少なくありません。入院後発症し、重症の精神疾患を併発することもあります。精神疾患を持った患者さんにも対応できる急性期機能を併せ持った精神科病棟の必要性を痛感し、精神科身体合併症病棟（MPU 病棟）の新設を目指しました。昨年9月より稼働を始めましたが、今まで精神疾患を持つがゆえに十分な身体のケアがなされなかった患者さんには朗報と考えております。

伊勢赤十字病院は、がん、脳卒中、心筋梗塞、糖尿病、精神疾患の5疾病と救急医療、災害医療、へき地医療、小児、周産期医療、新興感染症医療の6事業に十分対応可能な急性期病院として、また地域の最後の砦として地域医療を堅持し、患者さんだけでなく医療者にも求められる病院を目指したいと考えます。

今年もご支援、ご協力の程宜しくお願いいたします。





2022 年を迎えて

三重県病院協会理事
紀南病院院長
加藤 弘幸



新年あけましておめでとうございます。2020年4月1日付で、紀南病院の院長を拝命し2回目の新しい年を迎えることができました。昨年は新型コロナウイルス感染症に対する対応で明け暮れた1年であったように思います。やや対応にも慣れて、このまま落ち着いてくれば、と期待していましたがデルタ株の第5波で三重県も大変な状況となり、特に中勢から北勢の地域の先生方のご苦労は計り知れないのもであったと思います。紀南病院は設備やマンパワーの問題から、地域での発症例の対応と後方支援病院的な協力しかできませんでした。第5波も収束して少し落ち着いた年末年始を迎えることができましたが、今まさにオミクロン株による第6波の状態となり今後の患者数や患者様への対応が懸念される場所があります。新型コロナウイルス感染症もはやく5番目の風邪ウイルスになってほしいものです。

紀南病院としましては、新型コロナウイルス感染症が収束した後の対応も考えなくてはならず頭が痛いところです。医師不足はもとより看護師、看護補助員、薬剤師の不足が病院の存続に直接関わってきております。地元出身の方でこのような職種の方を募集することは元より地域でこれらの職種の人材を育てる取り組みも必要ではないかと考えております。

紀南地区は産婦人科問題も大きな課題で、2022年3月から新宮市立医療センターでのお産ができなくなるという発表がありました。年間300件ほどのお産があったそうです。紀南病院ではすでにお産ができない状況で紀南病院の医療圏の妊婦さんが新宮市立医療センターで出産されるケースも少なからずあります。現在熊野市に産婦人科で開業されているクリニックが1病院ありますがあまり無理もお願いできない状況です。

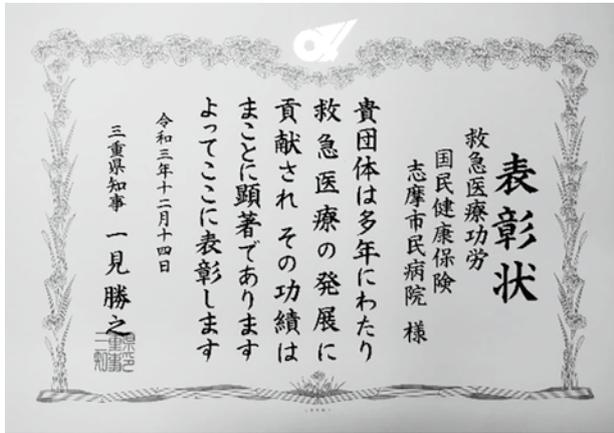
新型コロナウイルス感染症対策、病院経営、職員不足、産婦人科問題等ネガティブな話題ばかり揚げましたが、三重県病院協会様からも引き続きご支援をいただきつつ今後ともこの紀南病院をよろしく願い申し上げます。



受賞おめでとうございます

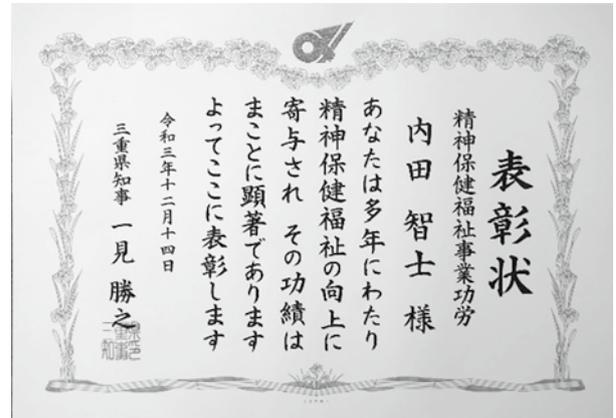
🌸 令和3年度救急医療功労者知事表彰

(団体) 国民健康保険志摩市民病院 様



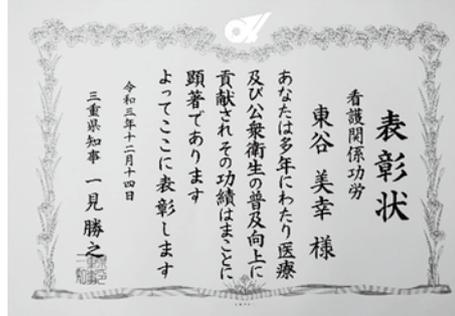
🌸 令和3年度三重県福祉関係功労知事表彰

「精神保健福祉事業功労」 松阪厚生病院 内田 智士 様

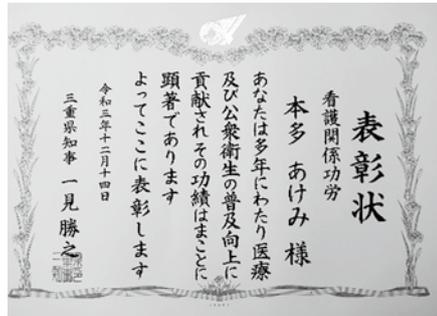


🌸 令和3年度看護関係功労者知事表彰

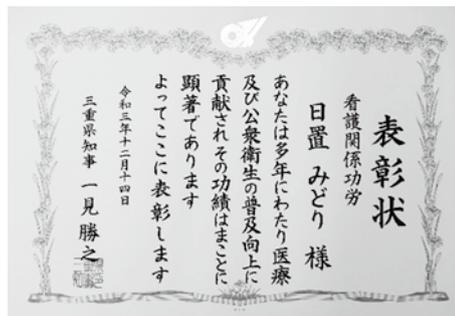
松阪厚生病院看護師 東谷 美幸 様



松阪厚生病院看護師 本多 あけみ 様



社会医療法人居仁会 総合心療センターひなが看護師 日置 みどり 様





身近になった東紀州と熊野詣

医療法人安仁会 水沢病院
事務長 内山 直大



新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言が解除となった12月初旬、私用で初冬の熊野市を訪れることとなった。熊野は私が20代の頃、5年間勤務した地であり、熊野を離れてからは仕事で時々訪れるものの私用となれば実に40年ぶりの訪問である。私が勤めていた昭和50年代の東紀州は、「東紀州に高速道路を！」スローガンに、津から荷坂峠を越え尾鷲まで2時間半、尾鷲から矢ノ川峠を越え1時間と二つの大きな峠越えで3時間30分の長い道のりであったが、スローガンが現実となった現在は、伊勢道・紀勢道を経由し1時間半弱で着く身近な地域と変わりました。



水害記念碑

の水位が20mも上昇し大災害となった平成23年の紀伊半島大水害で被災・流失した道の駅「瀨峡街道熊野川」が復旧され、広場では最高水位到達点を示す記念碑が建てられていた。

さて、私用も早々に片付き時間も十分あることから、折角の機会と世界遺産である熊野本宮大社に参拝することとした。私にとって熊野本宮大社は30何年ぶりの参拝であった。

一路、目的地を目指し、車を走らせ、道中、七里御浜海岸では、空と海の青さ、また初冬の熊野灘に輝く穏やかな陽の光は、昔と変わらぬ自然豊かな風景であった。途中、熊野三社の熊野速玉大社の参拝を済ませ、新宮市から「日本一距離の長い路線バス」で有名な国道168号線を北上した。

沿道では、今は眼下に緩やかに流れている熊野川



初冬の熊野灘

改めて奈良・和歌山・三重の三県に甚大な被害をもたらした台風であったことを痛感した。熊野を出発し約3時間、川湯温泉や湯の峰温泉を横目に最終目的地である熊野本宮大社に到着した。

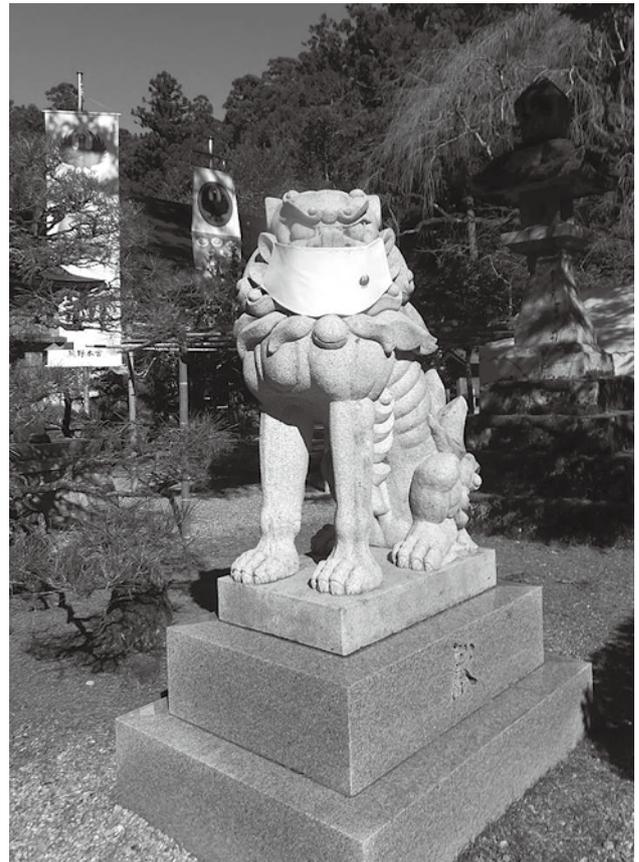
狛犬にマスクが掛けられている本宮神社の参道や日本一大きな鳥居のある大斎原周辺では、多くの家族連れやツアーの方々の賑わいが見られ、ちょっとした「蟻の熊野詣」の光景であった。

帰りに「花の窟神社」を訪れ、私の世界遺産巡り・熊野詣も終わりとなった。

350 km、約8時間の旅、高速道路により身近になった東紀州、伊勢路・熊野路を満喫した初冬の1日でした。



本宮神社参道



マスクの狛犬



今の時代、そしてこれからの思うこと

医療法人社団プログレス四日市消化器病センター
事務長 田中 秀人



幼少期の流行といえば、「インベーダーゲーム」「カセットテープ」「じゃむんちょ」。当時は私の周りでは聞かない日がないほどに子どもたちの心をつかんでいました。あれほどまでに熱狂していたものが40年近く経った2021年にはトレンドはおろか、知っている人もいないのではないかと思います。寂しい限りです。

医療関係の仕事について20年余りになりますが、時代の変化とともに、診療報酬改定や労務関連の法改正など様々な面で変化し続けており、時代に即した病院運営が求められていると実感しております。ここ数年では新型コロナウイルス感染症の拡大防止の視点に立った新しい生活様式や、個々の意志・事情・環境に応じ時間や場所にとらわれず働き方を見直す働き方改革など、今まさにニューノーマルな時代を構築する過程にあると思われまます。数年前には考えもしなかったマスク着用の生活。かつての映像の中でマスクをつけず大人数が盛り上がっている音楽イベントを見るとむしろ新鮮な気持ちになります。また、PCやタブレットを使用して遠隔で面会や会議ができるオンライン〇〇も今では当たり前になってきました。従来の考え方や様式にとらわれることなく柔軟に対応していくことが旧型人間の私にとってはなかなか悩ましいことであり、日々苦闘しております。しかしながら、若い世代のスタッフも増え、世の中の流れに乗らなければと少しずつ固い頭を「柔らかく柔らかく」と自らに言い聞かせて務めております。



四日市消化器病センター北面全景

私は元来、「人が集まる施設」というものを理想に掲げ、患者様や利用者様が安心して利用できる病院、スタッフが働きやすくやりがいを見つけ、活力をもって業務に励める病院を念頭に置きながら経営者と対話を続けてまいりました。それは、この地区の医療資源の継続と同時に雇用機会の確保に繋がると考えております。昨今サステナブルという言葉が世間では随分と使われるようになりましたが、医療機関における「持続可能性」とは、医療資源の存続をどのように成しえるかではないでしょうか。私たち、四日市消化器病センターでは、医療技術や知識の充実を図ることはもちろん、患者様・利用者様の安心安全や満足度向上を目指し、地域医療をこれからも支えていくことが使命であると考え取り組んでおります。一方、当院で働くスタッフが自分たちの生活や環境に合わせた色々な働き方で、楽しく活力ある病院となることも求めていきたいと思っております。バレーボール、ランニング、野球、自動車等様々なサークル活動を通じて、スタッフ間のコミュニケーション構築と地域の方々とのつながりを図っております。アラフィフの私も体にムチ打ちながら白球を追いかけ、若い者から元気をもらっております。20代、30代の者の動きを見ると悔しくてたまりませんが、運動も仕事も次の世代へしっかりとバトンをつなげていくことが大切だと考えております。以前からの良きところは継続し、時代の流れとともに変化をすることは積極的に変えていく。そんな対応が医療業界にも求められるのではないかと考えます。10年20年そしてその先の三重県の医療が安定して継続されることを切に願っております。





三重はふるさと 空中散歩

松阪市民病院名誉院長 小倉 嘉文



泰運寺の紅葉 松阪市飯高町波瀬



サオリーナ 津市北河路町



北島神社 1 津市美杉町上多気



北島神社 2



四季折々

三重県病院協会理事長 竹田 寛



上から眺めた犬たでの群。花穂の赤と葉の緑が美しく調和します。



夕陽に映える犬たでの堤。赤い帯がどこまでも続きます。



赤いつぼみとほんのり桃色がかった白い花が美しい桜たで。お正月の飾りのようです。



群れて咲く桜たでの花。後方は愛用の自転車です。



報告

三重県病院協会だより

| 開催日 | 事項 | 出席 |
|---|---|---------------|
| 第56回定例理事会 令和3年11月16日 web会議 | 1. 外来機能報告等について 三重県医療保健部医療政策課医療計画班 大仲 央係長 2. 理事長報告 ◎理事選出(案)について 3. 各種委員会等出席報告 1) ドクターヘリ運航調整委員会事後検証会 2) 新型コロナウイルス感染症対策協議会 3) 11月22日(月) 接遇研修・医事事務研修会開催について 4. 情報交換、その他 | 理事16名 監事2名 |

研修会

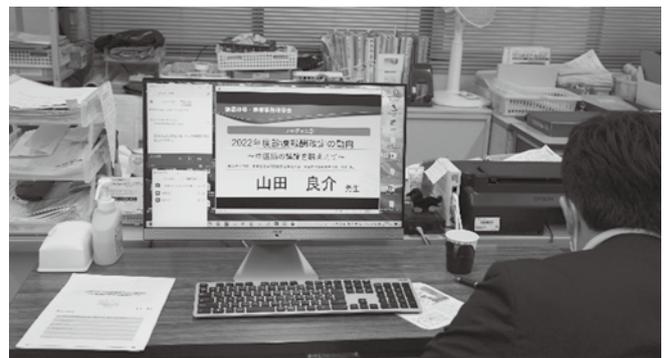
| 事業名 | 対象 | 開催年月日 | 開催方法 | 講演テーマ | 講師 | 参加人数 |
|-----------|-------|-----------------------|-----------------|--|---|------|
| 接遇研修会 | 各部門職員 | 令和3年 11月22日 (月) | オンライン (Zoom) | 安心と信頼を築く良好なコミュニケーションのために ～医療機関に求められる接遇とは～ | (株)ニチイ学館 医療関連事業本部 運用企画部 品質向上課 係長 疋田早苗様 | 183名 |
| 医療事務職員研修会 | 各部門職員 | 令和3年 11月22日 (月) | オンライン (Zoom) | 2022年度診療報酬改定の動向 ～中医協の議論を踏まえて～ | (株)ニチイ学館 事業統括本部医療関連事業本部 事業推進部事業推進課 課長補佐 山田 良介様 | 183名 |

医師による医学講座の動画配信(ホームページ掲載)

| | | |
|-----|-------------|-------------------------------------|
| 第5回 | 令和3年12月13日～ | 「循環器疾患について」 名張市立病院 循環器内科 武内 哲史先生 |
|-----|-------------|-------------------------------------|

ジェネラリスト養成研修会

| | 対象 | 開催日 | 開催方法 | 内容・テーマ等 | 講師 | 参加人数 |
|-----|---------------|-----------------------|-----------------|---|---|------|
| 第6回 | 経営管理職 中堅職員 | 令和3年 11月24日 (水) | オンライン (Zoom) | 病院施設管理の基礎 「病院施設管理の基礎」 「病院施設管理の現状と管理計画の策定」 「病院建替の留意点1」 「病院建替の留意点2」 | デロイト トーマツ PRS株式会社 一級建築士 小田 明彦 様 一級建築士 山口 聡 様 | 36名 |



オンライン研修会(令和3年11月22日)



報告

三重県病院協会事務部だより

医師事務研究部会

| 活動経過報告 | 事項 | 場所 | 出席 |
|-------------------------------------|--|-------|-----|
| 第3回管理者定例会 令和3年10月27日（水）午後2時 | ①運営資金について ②オンライン座談会参加費について ③その他（意見交換など） | Web会議 | 7名 |
| 第17回管理者・実務者定例会 令和3年11月25日（木）午後2時 | ①今後の研究部会の運営等について ②オンライン座談会の開催について ③アンケート調査について その他意見交換 | Web会議 | 13名 |
| 第18回管理者・実務者定例会 令和3年12月27日（月）午後2時 | ①オンライン座談会の開催について ②アンケート調査について ③令和4年度事業計画について その他意見交換 | Web会議 | |

三重県精神科病院会だより

| 年月日 | 会議名・出席 | 摘要 |
|------------------------------|---|--|
| 令和3年11月4日 ～12月3日 Web開催 | 第12回三重精神科医療フォーラム 参加者：会員430名、会員外13名 大会テーマ： 『精神科医療は進歩と革新の 大きな変化の時代にさしかかっている』 ～精神医療の大変革の時代へ～ 大会長：北勢病院 院長代理 若松 昇先生 [担当病院] 北勢病院 大仲さつき病院 多度あやめ病院 東員病院 | ◎演題発表 46演題（オンデマンド方式） ◎ランチョンセミナーA （ライブ配信・講演後録画配信） 「統合失調症における知覚障害から妄想へ」 座長：大仲さつき病院 院長 伊藤憲昭先生 演者：北勢病院院長代理 若松 昇先生 共催：大日本住友製薬株式会社 ◎ランチョンセミナーB（ライブ配信） 「精神科領域での不眠と過眠への対応」 座長：東員病院・認知症疾患医療センター 院長 山内一信先生 演者：名古屋大学大学院医学系研究科 精神医学・親と子どもの心療学教授 尾崎紀夫先生 共催：エーザイ株式会社 |
| 12月17日 | 12月例会Web会議 17名 | 1. 三重県病院協会理事選出について 2. 第12回三重精神科医療フォーラムについて（報告） 3. 第13回三重精神科医療フォーラムについて（報告） 4. 各種委員会、審査会報告 5. 情報交換「三重県精神科病院会への学会・研究会等からの寄付金要請への対応の目安」について 6. その他 |
| 12月17日 ～19日 | 後援 三重県総合文化センター（ハイブリッド配信） | 2021年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術 総会 |



12月例会 Web 会議(令和3年12月17日)



快適が好きです。

親しみやすさを感じさせるユニフォームは癒しを与えてくれる



明るい励ましの声が響いてくるような、温かな絆のシンボルとも言えるユニフォーム。機能的な先進素材と、軽快で動きやすいデザインが理想の協働環境をサポートします。



(旧社名 株式会社 倉田白衣)

あらゆるニーズに、確かな「ユニフォーム力」でお応えします。

★おかげさまで、経済産業省「はばたく中小企業・小規模事業者300社」2019を受賞しました。

- 津 本社 津市中央 12-1 TEL059-226-8911 FAX059-225-8911
- 四日市支店 四日市市諏訪町 12-1 TEL059-351-8911 FAX059-351-8910
- 伊勢支店 伊勢市宮町 1-9-20 TEL0596-24-8911 FAX0596-24-8583
- 名古屋支店 名古屋市東区飯田町 47 TEL052-931-8910 FAX052-931-8919
- ホームページ <https://www.kurauni.co.jp> ●FreeDial 0120-11-8911

NEWS! 各スポーツブランドのメディカルユニフォームに加え、高級ドクターコート等も取扱っています。

ユーザ様のご意見をもとに、新無償ツールをご用意しました!

何から手をつければいいのか...



病院経営分析に必要な指標を網羅!!

- DPC対象外病棟、外来を含めた病床機能別で分析
- 病床機能に合わせたベンチマーク
- 過去5年間のデータで見られる
- 資料をワンクリックでPowerPoint出力
- 見たい期間、比較したい期間を自由に選べる

詳細・お申込はこちらから

<https://portal-ap.mdv.co.jp/app/mdv-act>

お問い合わせはお気軽にご連絡ください



メディカル・データ・ビジョン株式会社
〒101-0053 東京都千代田区神田美土代町7番地 住友不動産神田ビル10階

MDV Act担当
☎ 03-5283-6911

メールお問い合わせ
✉ kikaku-s@mdv.co.jp

三重県医薬品卸業協会

Company Profile

会社概要



◆人材サービス

スタッフの増員や補充が、スピーディーかつ的確に行えます。有資格者をはじめ、医療・介護の職種に特化した「人材派遣」「紹介予定派遣」「人材紹介」を行います。

◆メリット

- 必要なスキル・経験を持つ人材を迅速に確保
 - 採用活動のための経費、事務手続きなどをカット
 - 採用ミスマッチを防止
 - 業務の繁閑に柔軟に対応
- ※契約内容により派遣法上の制約があります

●契約形態

一般派遣 紹介予定派遣 人材紹介

●対応職種

看護部門

看護師・看護助手
クラーク

事務部門

医療事務・医師事務
受付・コンシェルジュ

案内部門

オペ室業務・中材業務
SPD業務

専門資格者

医師・薬剤師
放射線技師・PT・OT

介護部門

介護ヘルパー
介護福祉士

その他

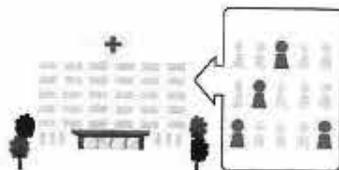
薬局業務・調理業務
リネン清掃業務

◆滅菌業務

弊社では、中央材料室及び手術室の滅菌業務や院内物流業務を遂行する専門の部署「SAS事業部/手術滅菌サポート事業部 (Surgical Antiseptic Support) 事業部」を設け、滅菌業務を行っています。派遣型での導入から一括委託への移行まで、人材派遣のノウハウと滅菌業務の専門知識を有している弊社ならではの提案をいたします。

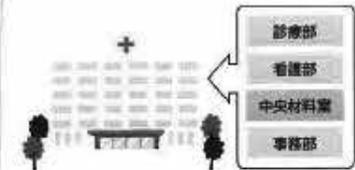
◆メリット

- 中央材料室一括から、一工程のみの委託にも対応
- 専門会社ならではのノウハウ、品質保証
- 院外外注型サービスも可能



ニーズにあった人材を弊社にて対応

Medical Care



中央材料室の業務を一括委託

□会社名 株式会社ルフト・メディカルケア 三重オフィス

□住所 〒514-0027
三重県津市大門6-5 大樹生命津ビル2F

□連絡先 TEL.059-273-5556 FAX.059-273-5559

三重県病院協会会報
令和4年1月 NO.295

発行 一般社団法人 三重県病院協会
〒514-0009 津市羽所町 514 番地 サンヒルズ内
Tel.059-223-2744 E-mail:sshenyi896@gmail.com
編集 竹田 寛 諸岡芳人 高瀬幸次郎 加藤俊夫
(広報委員) 富本秀和 田中滋己 吉田 壽 小倉嘉文
印刷 伊藤印刷株式会社

これからの医業経営へ、「信頼」で結びたい。



医療・保健・介護・福祉施設が抱えるあらゆる課題を、
資格認定されたコンサルタントが解決します。

認定登録 医業経営コンサルタントは、医業経営に携わる方々が直面する課題に
的確・迅速に対応するため、所定の継続研修を履修し、常に資質の向上を図っています。

JAHMC
Japan Association of Healthcare Management Consultants
公益社団法人日本医業経営コンサルタント協会

三重県支部

支部 〒511-0834 三重県桑名市大福406-1 (税理士法人中央総研内) TEL:0594-23-2448 FAX:0594-23-3303

本部 〒102-0075 東京都千代田区三番町9-15 ホスビタルプラザ5階 TEL 03-5275-6996 FAX 03-5275-6991 <http://www.jahmc.or.jp>

